

子守教育法

渡邊嘉重著
普及舍閣全

現
次
冊
次

1
4

福岡第一師範學校
(學校圖書)

| | | |
|----------|--------|---|
| 登錄 番號 | 第 | 號 |
| 社會科學門 | | |
| 教育 部 | | |
| 通教育初等教育 | | |
| 目 | 次 | |
| 全 1 | 冊ノ内第 1 | 冊 |
| 分類 番號 | 第 | 號 |
| 378.2 | | |

福岡縣師範學校

| | | | |
|-------|----|-----|---|
| 書 | 門 | 育 教 | 圖 |
| 部 雜 | | | |
| 番 | | | |
| 號 | 15 | | |
| 2 冊ノ内 | | | |

子守教育法より叙

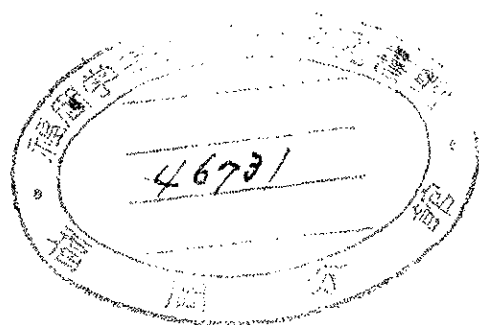
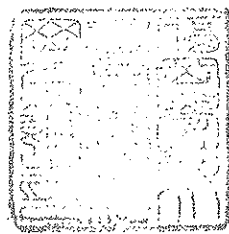
教育ノ普及ヲ計ルハ蓋先覺者ノ責任ニシテ一夫一婦
モ至學ニ後ノ中ニ世ヲ降ルナカシムルハ即普通教育
育ノ精神ナリ誠ニ兄ヨ邦國ノ文明ヲ標スル所以ノモ
ノハ抑寡輩ノ博識家アルガ爲カ將教育ノ普及スルガ
爲カ余輩計シテ言ハントス唯寡輩ノ博識達才アリ
テ其ノ民ヲ教ヘザレバ國家強ク人々普通ノ知識ヲ有シテ
世ニ要シ生ヲ計ルニ懺ナキトキハ社稷安シト謂フ諸ヲ
兵事ニ譬ヘシカ將帥能ク萬人ニ敵シタルヲ計ルノ勇
略ヲ盡ルモ其ノ士卒ニシテ疲羸怯弱ナラバ何ニ由テ

カ敵ニ克ツコトヲ得シヤ昔者漢楚ノ虐ヲ中原ニ事フ
人ノ武ヲ以テスルトキハ漢祖烏ヨ得テ楚王ニ敵セシヤ而シ
テ漢祖ノ能ク之ヲ獲タル所以者ハ則何良位平此
ノ俊傑アリテ之ヲ捕獲シ且將率ハ強勇ナリシヲ以テナ
リ然レバ則余輩——進デ教育ヲ普及セシムルニ勗ルハ今
日ノ急務ニシテ決シテ忽ニスベカラザル論ヲ俟タズ渡邊
亦ハニ見ルアリ嘗テ子貴家枝ヲ設ケ其ノ方類方法
ヲ輯録シテ獎金ニ寄ス受テ之ヲ看ルニ余輩ノ持
論ト略シテ越ヲ回クスル者アリ豈ニ是レノ少長同アル
ガ為ニ之ヲ擠ルニ忍ズベケンヤ因テ氏ノ嘆ヲ容レテ梓

ニ上セ以テ世ニ公ニス先覺者是ニ據テ推察シ斯ノ良
育ノ普及ヲ計ラバ其ノ益スル亦奚ゾ僅ニ保婢ノ風俗ヲ
一洗シ其ノ知識ヲ開發スルニ止ランヤ其ノ第一歩ヲ
踏ムニ及テ未氏が能ク艱難ニ堪ヘ排議ニ忍テ此ノ奇
ヲ成セルノ執心ヲ嘆賞セズバアザガルナリ故ニ余輩亦
ニ評シテ曰渡邊氏モ亦先覺者タルノ責任ヲ肩カシメ
ガルノ人ナリト看官以テ何トカ為ス

明治十七年六月

普及舎主渡邊



子守教育法

緒言

世の兒童の中よても子守てふものほど哀れは
るかきものいあらばうしされば斯の女の兒等
を教へ導きてひとあみくの學を修めむる
ハ教育家の任あり余此よ見る所ありて嘗て子
守學校を設けいさゝる力を盡しるゝ頃日よ
至りてハやゝその効のあらはれぬるほどふそ
の概畧を世よ告げて普く此の學校の設あらせ
まほしとてゐくハものしゝなりされどその設

立日尚淺く百事いまだ全く整へざりて十分の
經驗を積むゝ由なきのこゝをのれ元來謗劣に
して文字の嫺へど且倉皇此の書を稿したるは
杜撰僻説の嘲もいふて免るゝことを望まんと
看官幸々訂正を加へたまへらば余は幸はふを
だし

明治十七年五月

著者 識

子守教育法

目次

第一章 子守學校を設くるの趣意

第二章 子守生徒の專學科を授けんよりハ

寧先其の容儀舉動の陋習を矯め正
すべし

第三章 子守をして學藝を好むの意を養成
すべし

第四章 學校を以て快樂の場と做さしむべ
し

第五章 子守學校の性質ハ自他の學校と異

あり

第一 校舎の位置

第二 校舎の構造附圖

〔甲〕 教場

〔乙〕 遊戲室

〔丙〕 鎮靜室

第三 生徒の机

第四 遊園

第五 空氣

第六 光線及溫度

第六章 稚兒の遊戲室及遊園に在る時の必
管護者を附けんことを要す

第七章 子守學校の教科ハ簡易あらんこと
を要す

第一 脩身科附諸禮式

第二 讀方

第三 作文

第四 習字

第五 算術

第六 唱歌

第七 諸學科口授法と據る

第八 遊歩

第九 説話附教科表

第八章 本校の經歷

第九章 本校維持法附十六年上半期校費決算表並學資金寄附人名表

以上

子守教育法

普及舎 閱

渡邊嘉重 著

第一章 子守學校を設くるの趣意

國家の民をして一人も不學の人あるべしめ之をして同等の自由と同等の幸福とを享けしむるハ斯の教の精神あるニ未開人民の間ハ動もこれバ教育のかくまでニ必要のものたることと悟らざる輩ありて殊ニ夫の「こもりてハ者の如きハ帝ニ斯の愛たき教育を受けざるのそ

あつた朝より暮るまで三五群を成して或
の郊野に或の街頭に歩いて其の背上の
嬰兒の啼を止むるの外別に爲すべきの務あき
より漸く終る厭ふべく賤むべき惡き戯れ日を
終ふるの風をふしその餘習漸く傳はりて跡を
絶つる期あく毒を社會に流すの源をなすあら
んとす請ふ想ひ見よ嬰兒の人の萌芽として成
長の後之をして大なる材とあらむると否と
一は此の期の培養如何に在り而して保婢の
則此の萌芽を護り又其の培養の功を助くる園

丁あり夫園丁として自園丁たるの藝術を修む
るなくば爲ぞ萌芽の成長を害し發育を妨ぐる
あきを期をべけんや之を余が此の學校を設く
るの趣意とす抑人の父母として其の子を愛せ
ざるものあき固より言を待たざる所あるま
今之を教ふることを怠りて終るかくる賤むべ
き惡き習に陥らむるもの則之をして然ら
しむる所以の原因あり何を之をして然ら
しむる所以の原因といふ教育を以て人生の須要
ある務となさざるは慣ること及家計の貧く

二十二年 十四
して學資を給するの道は苦むこと是有り是を
以て余いづもして子守は斯の教を授くる
の道を設げんと企つること已は年あり初試は
四五名の子守を集め小學校の内は席を設けて
先子女の情は感ぜしむべき談を演じけるは彼
の輩大小感喜しそれより日々校前より來りて頻
に談を聴ふんと思ふの狀あり余是は於て謂
らく子守學校を起すの機已は熟せりと東より
奔り西より走りて此は志あらん人を募りしは幸
して此の舉を賛成する者四方より起り各自を

の分限は應じて之は資を寄附するに至る乃
之を以て筆墨紙等を購ひ求むるの資は供し茲
は子守生徒を募りて遂は五十餘名を得たり因
て左の方法を以て之を教授するは其の功效を
收むるの多きこと實は望の外は出るものあり

第二章 子守生徒に專學科の事を授けん

よりの寧先其の容儀舉動の陋習
を矯め正さべし

凡子守たるもの風習を見るは多くは皆放肆

野鄙よりて喻へば猶夫の野邊より生ひ出る荊のごとく實より取るべきところなきものあり其の容儀を望めば髪は亂れたる蓬のごとく面は垢より汚る衣の臭を帯び人をよりて近づき接するを嫌とせざらむるに至る而してその爲す所を問へば或人の庭園に入りて花を摘み果を偷と或は猥褻厭ふべきの淫謡を唱へ甚き路頭より徘徊して車馬より害を作し行人を嘲り侮る等その舉動の粗暴よりて言語の野鄙なる實より言ふより忍びざるものあり今斯る惡き風儀を正さ

んより主として學科を教へ授けんよりい寧輒く其の心は感ぜしむべき談を引きて人のものいふことを行ひと實より慎むべきものあることを説き示し先之をして天然の性より復らしむることを計らざるべからざるあり

第三章 子守をして學藝を好むの意を養

成るべし

古の賢き人の語より曰慣習の第二の天性ありと人の心たる自久く慣るる所の事い其の善と惡との別あり決して之を異まざるものよりて若

放逸に慣るゝとき、則ち自之を異まざるのとならず、或は自その非を悟りて之を悔めんとするも、事を作ると慵きものあるが故に、期して之を悔めんとするよへ必非常小其の心を勵まし其の情を克たせざるべう、故に自悔めんとするも猶且斯のごとく況や人を勸めて其の慣るゝ所の性を悔めしむるに至ては固より功を奏し難うと爲さず故に夫の子守女兒の若き怠慢に慣るゝ者をして學科を修めしめんとするよへ先之をして學の道を好むの意を起さしむ

るの術を施し其の第二の天性を化して善に遷らしめざるべうとせむ乃之が教師たる者意を此に用ゐて樂むべく喜ぶべき例あどを引きて學科を修むるに倦むの念を生じたるをらめ且慈を愛するの意を以て之に接するを肝要とせ抑慈を愛するの意に凡て人を誨ふに於て缺くべうとざるの要件にして此等の徒に接するに殊に緊要あり何となせば已に惡き第二の性を成して天然の良き性之が爲に蔽はれ動もこれに情を制せられんとするの恐あせむ

あり

第四章 學校を以て快樂の場と做さしむべし

樂を好みて之に赴き苦を惡みて之を避くるは人情の常にして決して奪ふべからざるものなるは今子守の輩は大抵放逸に慣れ遊惰に流るゝこと已ふ前は陳るが如く而して俄に學の道に就くときい多少其の課業のため心を勞ゝその規則に據て情を抑へらるゝ故に直に學校を厭ふの念を生じ之を看ること宛も懲治檻

の如く是るに至るあらんとすされば校内の裝飾その他玩具等も意を用ゐる彼の輩をして意に倦む厭ひしむるあらんことを務めざるべからむ中よ就て校舎の結構に意を用ゐて四方の眺望に富ましめ且その壁上を飾るは鳥獸草木山水等の畫圖を以てし自精神の暢び開きて娛を感じしむべく是るは最要ある所にして又修身の助とあるべき錦繪の類を飾れば殊に妙なり凡て人の情たるその慣習の如何に論あく決して汚れたるを好む鬱したるを快とせる者か

ければあり然れどもその畫圖の如き毫も觀るを厭ふべきものあるときハ却て畏れ懼るゝの念を惹き起すものあれば深く意を用ゐてこれを擇まざるべうとざるあり

第五章 子守學校の性質ハ自他の學校と異なり

子守學校の性質ハ他の各種の學校と相似て而して然らざるものあり抑他の各種の學校なる専生徒ハ學科を教へ授くるの外別ハ係累あきを常とせれども子守學校ハ至てハ學科

を授くるの外又嬰兒を管護するの係累ありてその業を授くるが如きも機を見て之を行はざるを得ぬ其の狀恰も幼稚園を兼ねるが如し故ハ校舎の位置、構造より以て玩具を排列する等の法ハ至るまで深く意を用ゐるゝあらざれば其の効を收むるゝ妨あるを免れ難し茲ハ余が計較する所の一斑を示して感を同くする君子の參考ハ供を讀む者幸ハ是ハ據て其の全豹を想ひ見るあらんことを望む

第一 校舎の位置

凡て校舎ハ人を教へ導く爲メ設くるものゝ
して生徒の昇降ニ便メ且清く静メして熱鬧
あふざるの地と相て建設すべきものあるこ
と固より論を待たざる所あるが斯の子守學
校の如きハ已メ上メも陳べたるが如く幼稚
園の性質をも兼ねるものあれば殊メ好き位
置を擇みて校舎を設けざるべからざる蓋土地
高く空氣燥きて四方遠く開け俯してハ河海
を瞰仰ぎてハ山嶽を望む等其の風光明媚の

好き地を得るときハ兒童の心自之メ感激せ
られて天然の雅趣を愛する高雅の情を發シ
學藝を習ハハむるメ於て殊メ妙ありと雖斯
の如き好き地を得るときハ各地必メ望む
べきメあふざれば先人家の遠近疎密及空氣
の燥濕等を視てあるべく好き位置を擇ミ以
て兒童の意を慊めんとを計るを肝
要とス

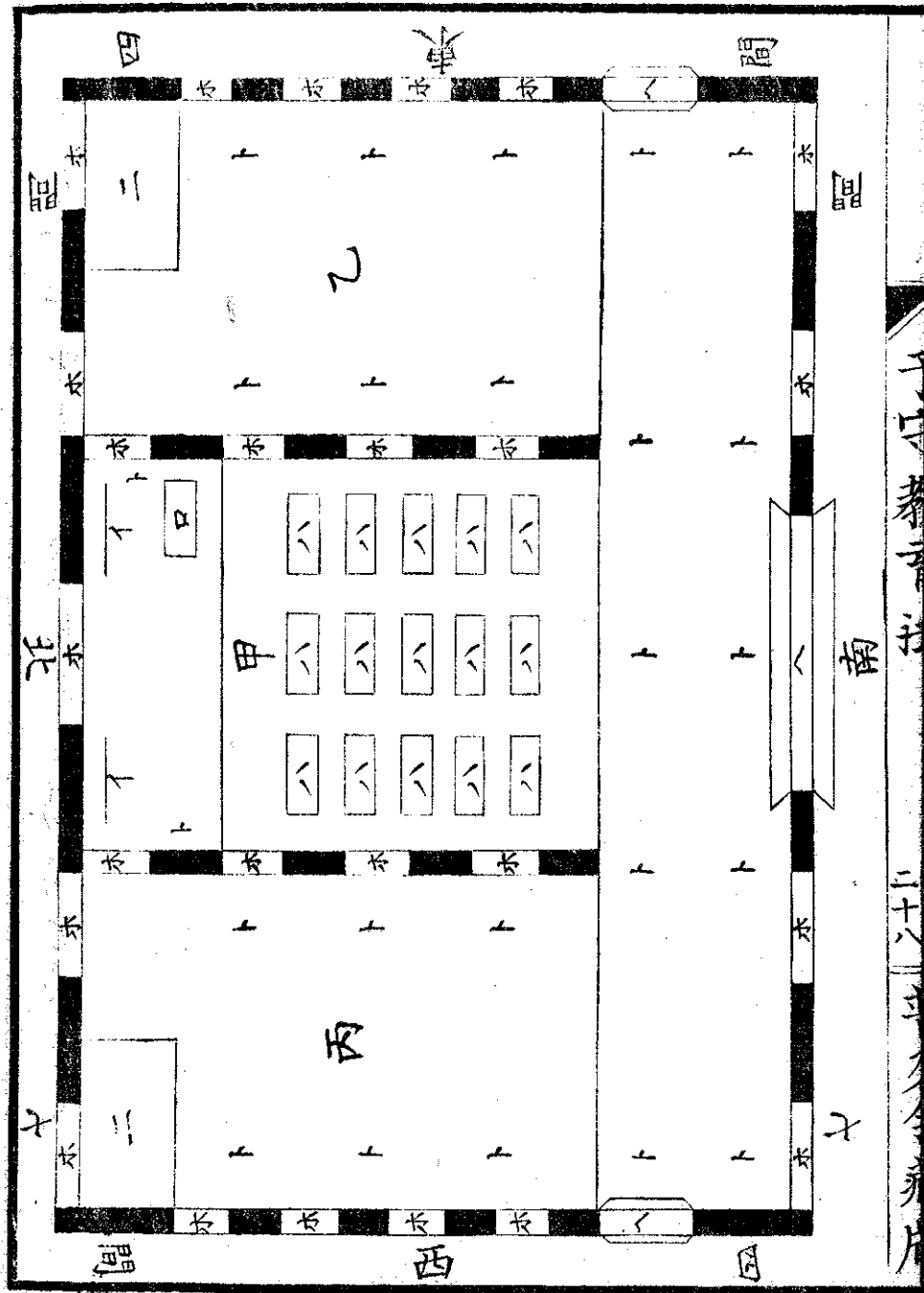
第二 校舎の構造

校舎の廣きと狭きとの固より生徒の多きと

寡きとを計りて之を定むべしと雖あるべく之を廣く大よせんことを要す蓋風雨等の日生徒の校内に遊び戯れて遊園に代用するの便あらんことを欲せざるあり其の構造は長方形にして南方に面せしめ四面の窓に硝子扇を用ゐ而して校内すべて床板を用ゐ寢筵を地上に敷き列ぬるを宜しは是足音を發して嬰兒の睡を驚かさんことを避け兼て出入運動するの際或は誤て轉び仆るゝ等の事あるも嬰兒

並に子守をして虞らざる傷痕を被るありしめんとするが爲あり校内を三室に區劃すること左圖に示す如く之を教場、遊戯室、鎮靜室とす

附て言ふ茲に示せるの圖は約四十名の生徒を容るべきものにして圖中の(イ)は黒板を示し(ロ)は教師の机(ハ)は生徒の机(ニ)は玩具を藏むべき架(ホ)は窓(ヘ)は教師及生徒の出入口(ト)は地上に敷き列ねたる筵を示せり



〔甲〕教場 子守生徒の學科を教へ授くるに用ゐるの室とす左右の壁の牕を設け硝子扇を装附して光線を引き兼て左右兩室に在る嬰兒の動靜を窺ふ小備ふ二歳未満の嬰兒方より睡し就き二歳以上の子も亦或は睡り或は玩具を弄して遊び戯れて子守の管護を要せざるの機を見て其の閑暇ある者を撰に適宜に諸種の學科を授くべきものとす

〔乙〕遊戲室 二歳以上六歳未満の稚兒即五官

の作用稍長くて手づから玩具を弄し自快
 を取ることを得る者を以て遊び戯をいむ
 るに用ゐるの場とは故に此の室に架を
 設けて諸種の玩具を備へ且壁間に雞、犬、
 牛、馬、蝶、蜂、花卉、舟、車等凡稚兒の意を娛ま
 め目を喜ばしむべき鮮やかにて美しき畫圖
 を掲け以てその感覺を開き思想を練るの
 用に供すべきものとす

〔丙〕鎮靜室 二歳未満の嬰兒を睡らしむるに
 用ゐるの場とは四面の壁間に五彩の紙

片及綵毬の類を連ね懸くべし即嬰兒の睡
 を醒まして啼くときの子守をして之を管護
 せしめ或は脩身國畫其の他凡て世の教に
 益ある子守歌の類を唱へ或は壁間の彩紙
 片若くは綵毬等を吹き揺るゝて以てその
 啼を止めしむるに備へ兼て嬰兒の眼を物
 に注ぐの力を敏くせしめんことを計る
 べし

第三 生徒の机

子守生徒に用ゐる机は下板を架して器具

を此に藏むるに充て又其の面より布片を貼
たるを宜しす是筆硯を出納し石盤を用ゐる
等の際音響を作れことを防がんが爲にして
蓋又緊要の件なり而してその製の高きもの
と低きものとを別ち之を排し列ぬるよりそ
の低きものを前面より列ぬ漸く高きものを後
より列ぬべし蓋生徒の身軀よりたのきとひくき
との別ありて矮きものを前面の席より就め
めたるきものより後面の席より就めしめんと
するが爲あり

第四 遊園

子守學校の遊園は土地平小して四面豁け瓦
礫等の跌くべきものなきを要せ而して他の
各種學校の遊園の如く鞦韆架、木馬等凡て危
險の恐ある器を備ふるを要せず唯綠樹、花卉
の類を栽へ又稚兒の用より應むべき珍く奇き
玩弄の具及軽く易き遊戲の器等を備へてそ
の情を慰め動作より慣れしむべきのこ

第五 空氣

空氣の人身より切要にして各種の學校亦その

新陳代謝の法を求め校舎の構造に意を用ゐるの論を待たざる所あるが斯の子守學校の上にも陳るが如く生徒の悉く蓬のごとき髪垢づきたる面の女兒にして其の衣の脂垢と嬰兒の屎尿とよ汚れ且稚兒を携ふるものなせば其の惡き臭い實に耐ふべからざるものあり殊に空氣の流通を便せざるはあはれに忽ちその惡き氣を感じて生徒の氣力を弱くし怠慢の意を惹き起し終に頭痛眩暈等を發せべきことあはれに甚き一時疫の傳染を招

くよ至るあらんとす教師たるもの深く此の意を注ぎ時々牖の扇を開閉して空氣の流通を計らざるべからず

第六 光線及溫度

光線及溫度も亦空氣と同く最人身に要するものにして此の學校の旁嬰兒をして睡し就るゝめ或は遊ばしむるものあれば殊にその度を適宜にせざるべからず何となせば嬰兒は猶草木の嫩芽のごとく最深く管護を加へざるを得ざればあり

光線の射入劇きとき、眼の病を發するの憂あるが故に硝子扇は淡青色若くは白の牖布を懸け以てその度を加減せざるべし。たと雖甚く光線を蔽ひて校内を暗くするが若きは爽は快きの場をして却て幽鬱の境と做し大に精神の暢び開くを妨ぐることもあり意を用ゐざるべからず

温度を調ふるも亦然り若校内の熱度劇きとき呼吸窒りて憂ひ悶ふるの情を惹き起さべく亦寒氣甚きとき血液の循環整へば

て病根を醸ふことあり且俄に寒熱の度を變ぜざるが如きは大人身は害あるものあれば教師たるもの意を此に用ゐ窓戸の開閉のあはるべく遊歩の時間及朝夕適宜の機は於て寒温鍼を備へて常に校内の温度を調へ務めて寒熱の整へざる患を免るべし

第六章 稚兒の遊戲室及遊園に在る時の
必管理者を附けんことを要す

稚兒の遊戲室或は遊園に在て遊び戯るる當に躓き仆るゝ等の虞あるものあり或は玩具を

相奪ひて争鬪を生ずるの憂あり故に其の子守
 の學科を教へ授くるの際に必數名の管護者を
 子守の中より撰きて稚兒を管護せしめざるべ
 きなり抑此の管護に任ぜべき者に子守生徒の
 中十五六歳乃至十二三歳よりて較實著の者を
 撰きて之に充るも亦可ありと雖蓋斯の類の學
 校を設け得べき地にては子守の數も多あるべ
 く隨て老婆の品行較正くして且稚兒を保育す
 るの經驗に富める者もあるべし若し此等
 の老婆を得て管護の任を托せば一層の好き結

果を見るあらんとす

第七章 子守學校の教科ハ簡易ならんこ

とを要す

子守の上にも言へるごとく皆稚兒を管護す
 るの任あるものなれば之に教へ授くるは多くの
 學科を以て又一時は難を責るに到底行るべ
 き事なれば故に余は務めて簡易に従ひ且日
 用は適切ある學科の初步を以て之に授くるの
 便利たるを知り先左の學科を設けて適宜に之
 を教授を乃その概畧を記して教育家の參考と

供ふとす

第一 脩身科附諸禮式

徳と養ふの教ハ猶夫の智を養ひ體を養ふの教と相俟てゑばらくも離るべからざること今更ニ喋々を要せざる所あるが女子の若きハ殊ニ言行の篤實温順あるを貴ぶのならぬ子守ニ至てハ惡き習ニ染みてその言ふこと並ニ行ひざしの野鄙あるをなせば務めて力を此の科ニ用ゐて以てその徳性を養ひ言語動作の法より以て物を授け受るの諸禮

式等ニ至るまで懇ニ教ヘ導みざるべからず蓋此の科を授くるニハ專口授及式様の二法ニ據るを最良とす

脩身口授の法たる勉めて生徒の感想を喚び起るを以て目的とせるものあるが故ニ教師たる者先自容儀を正くし舉動を慎みて且校内机案の位置及諸の器具の裝置ニ至るまで意を用ゐて之を正くせしめ而して教授を行ふニハ先簿冊を備へてその目的及題號等と之ニ録し古の人の佳言等を擇みて黑板ニ書

き生徒をして之を讀之を講ぜしめ次で問
答を雜へて適當の談をなし其の間時應
て音調を變へ或は式様を以て事擬へ全く
生徒の心貫き徹らしめんことを要に

第二 讀方

讀方科ハ文字を學ばしむる所以として文字
ハ即觀念を識る所の記號あれば先觀念を開
き次で言語を練り而して後文字を授くべき
ものあること已に識者の定論ありて存せり
故に兒童の初て學入る先日用の器物等

由り單語を文字綴る等の法を授くるを常
とせども今子守に任せる者の若きハその
年齢も稍長し腦の力も強くして思察力も富
めるものあれば之は事を教ふるに猶小兒を
教へ導くと同一の法を以てするときは却て
其の教授の功を害ふものありとす故に教師
たる者意を此に用ゐて恰もその生徒の力に
應むべきものを撰て以て教授法を活用をせ
し蓋此の科を授くるは生徒をして輪讀を
しむるを宜とす是同音綴るに讀ましむるときハ

之が爲は嬰兒の睡を驚おさんとするの恐あればあり

生徒をして言ふことを正く習ひ熟せしむるの教授の際最意を用ゐるべき要ある件として即讀方の文字と言語とを習はしむるの科あれば殊に此の點より力を盡さざるべからざる此の科に於て苟も訓練の功を誤るときは其の謬を轉じて正き音調に復せしむること頗難しとす故に言語、字句の變化等を理會せしむること甚緊要あり

第三 作文

作文といふ自意に念ふ所の事を文字にて記し出さるの法として強き記憶と敏き思想とを要するものあること固より論を待たざる所あるが其の初より先實物を示して生徒の觀念を開き而して後その名稱、部分、性質、功用等を問答し若くは之を説き示して書き綴らしむるを宜とす抑作文といふ自説を作り出して之を筆記せると人の文章を平易に説きて之を復文章に綴るとの二法あり而して女兒の如

きよの專人の作れる章句を讀み示して復之を文章に綴らるゐるの法即復文術に據り平假名を雜へて之を書き綴らるゐる務めて女子日用の便に供へんことを以て目的とせざるを要し又書牘文を綴らるゐるよゐあるべくせんきれづみを用ゐて月日氏名番地等を記し載せるの法に至るまで習ひ熟せしめ且生徒をして互に往復せしむる等の法を兼ね施し務めて實地の用は應ぜしめんことを要し

第四 習字

此の科を教へ授くるよゐ先物品の名稱、日本國畫、郡村町名、氏名畫、日用文等凡て實用に急あるものより習はしめ且筆づゐひの速よゐて字形の正あらんことを要す蓋日用文を習はしむるよゐその高尚ならんことを欲して奇ある文字を用ゐ或は亂を書きしめて讀むに苦しむる如き手帖を授くる等の事あること勿れ殊に子守に任ざる女兒の輩に至ては學の大成を期せること固より難しとせざる所をば專假字を雜へてその日用を辨ずるを度と

爲一層意を此に用ゐて筆づゐひ及音訓の
讀方等を授くるに勉めざるべからず

第五 算術

人の智覺を敏くし、判決、推理等諸の能力を開
くの功を有する者算術の右に出るものある
るべし故に實數の方便に因り確實ある觀念
と與へて以てその定則を理會せしむるに實
に緊要の務ありとす

然れども算術は諸の學科の内より最多くの
時間を要し最大の心力を勞するものとして

而して今の女兒の如きは僅に數年の間小學
が得たる所を以て他日成長の後之を實地に
施して一家の經濟を理むべき任を負ふのこ
ろに殊に子守女兒に至ては常の良家の女
兒とその學期を同くせざるの情あり
て筆算の兩算術を學び得るが如きは固より
望むべきにあらず故に寧ろ算法に依て輕便
ある加減乗除の四術を脩めしむるの適當な
るに如き宜く簡易なる應用問題を設けて
之を授け兼て諸算術を習ひ練らしむべし

第六 唱歌

音樂唱歌の人の心を感化せしむるは功ある
の已は世の人の知る所として精神を磨き禮
義を厚く風俗を化し人情を和ぐる等固より
枚擧するは遑あらば故にミローホリスキー氏の
唱歌教授論は唱歌の功を擧て曰唱歌は人民
の生活上は於て快樂の情を生ずるものあり
又曰唱歌の衰頹するときは人民の氣風も從
て衰頹すべし音樂は生民の性情は善良の感
化を與ふるものあり唱歌は人民の心を和げ

國を愛するの情を生ぜしむるの元素あり唱
歌は技藝上は大なる効用を與ふるの徳ある
ものなりて即人の天性及その固有の技藝を
開くの本源と謂ふべし音樂は感情の口唇な
りと以てその効用の大畧を察し知るべし
余が郷は二人の老僧ありて一人は尺八を善
くし一人は胡弓は巧なり某の日之を學校に
請ひて樂を奏し歌を唱へゑめけるは此の時
生徒は已に科業を修むるは倦む方より耳を欽
て柝聲の遊歩時間を報せんことを待つの際

あり、今一聲の歌樂を聴て忽ち愉快の色
をあらへ、滿堂肅然として一人の敢て校外
に出る者なく亂れたる髪を被り垢づきたる
面を感むるの頑童惰兒と雖自その容を正を
を覺へざるに至り是に於て余益音樂唱
歌の人の心を感化せしむるに大なる効益
あるを信ぜり

子守女兒に常に子守謡と稱する一種の卑猥
なる歌を唱へて嬰兒の啼を止め兼て睡に就
しむるの術と爲その習慣あり邦内一般に

行はるゝ所あるがその謡たる皆賤むべくそ
の調たる亦厭ふべく多少風俗を紊し人情を
卑くするの弊あり余是に於て謂らく此の弊
を掃ひ去るよの唱歌の科を普く全國に及ぼ
すの善に如かず然れば子守學校に必唱歌
科を置のざるべからざるありと宜く修身家
事經濟歴史理學等の中適宜の題目を撰て
唱へ易き歌を作り子守生徒に授けて以て子
守謡に換へしむべし然れども未之に適すべ
き歌を得ざるが故に修身國畫等を以て姑く

之より充て更に他日を待て編述施行するあらんとす

第七 諸學科口授法に據る

子守學校に在ては讀方、習字、算術の三科を除くの外は大抵口授の法を以て學科を傳へ精神を練るものあるべき之を教師たらん者の必能く此の任に堪ふべきの學識を備へざるべからず蓋事を生徒に教ふるより之をしてその實物を目撃せしむるより善いありと雖一々その事物を示しは容易の業にあらざる故に

言語を假り用ゐてその實物の形狀及性質を發見するに足るべき名稱を授け他日その實體を視るに及びて輒くその形狀性質を知了すべきの道を指し示さばその言語は乃實體を示しに代へ用ゐるの方便と爲すべきあり抑口授にして若し猶講義に類することあるに當り却て生徒に聽くを倦む厭ふの念を生ぜしむべきの事あり且その事物の理を知了するや否やを測り知るに由なからんとすされば教師たる者能くその口授すべき學科

二六 教育論 五十六 小學校の教育
の關係を熟知し乃種々の要なる點を結び合
して論理上の秩序を整へ務めてその事理を
して首より尾に至るまで貫き徹らしむるを
旨とせざるべからず故に口授の法に宛も談
話を爲すが如く乃教師自之が先導者と爲
りて女兒の精神を勵まし思想を誘ひ以てそ
の胸の裏に一種の畫圖を現し出さむるあ
らんことを要す

第八 遊歩

已小遊戲室及遊園等の條に陳べたるが如く

子守學校に在てはその生徒を遊歩せしむる
の外兼て稚兒をして遊び戯れしめざるべ
らざるの係累あるのならず生徒を校外に
出るときは必稚兒を携へしめざるを得ず且
生徒の稚兒を管護すべきの任を負へるが爲
に專學科を修むるの餘間を得ること常に少
く而して稚兒はその精神頗活潑にして長く
同一の玩具を弄び同一の遊戲を取るを厭ふ
の情あり故に之の教師たらん者の百方意を
用ゐ一舉以て生徒の學業に益し稚兒の精神

を伸まべき策を求めざるべからず
是を以て時々天氣の晴和ある日を撰て生徒
と稚兒とを誘ひ引きて山林田野の間を遊歩
し已ぶまに草木花卉を摘み或は小
虫類を捕へ細石を拾ひ若くは取て以て
生徒に示し隨て之の性質その他効用等を説
きけるは遊び戯きて快を資るの中は於て生
徒は則知らず識らば意を廢物に注ぐの習慣
を養ひ稚兒の事には倦むことありて大に精
神を舒ぶべきの効驗あるを發見したり

第九 說話

嘗て接せざるの事と接し嘗て視ざるの物を
視る毎に之の性質効用等を知らんと望むこ
と猶渴する者の飲を求むると同きは兒童の
天性として是學業を授くるに於て最貴ぶべ
く重むべきの性質ありされば教師たらん
者の縦ひ瑣末の事物と雖務めて收め藏して
教授の資と爲し以て兒童の天性に由り之の
智識を開かんことを要す抑事物の間に自妙
ある意味を含めるものあり故に機を察して

簡易の之を説き示るときは生徒の疑の釋然
 とて解け大は好き結果を見ることあらん
 とす是を以て人を教へ導くの業は老練な
 る教師の事を生徒は教へ授くるの際專書籍
 の之に泥むことなく廢物を取て智識を誘ひ
 開くの資は充て簡易の語を以てその性質効
 用等を話し兒童の意を喚び起して此は注が
 るめんことを勉むるを常と爲りて余此の
 説話法の子守を教ふるに於て最要あるを知
 り用ゐて以て功を收むること亦少うとぞ

| 子守學校課程表 | | | | | | | | | |
|---------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|
| 學科 | 學期 | 第一學年 | | 第二學年 | | 第三學年 | | 第四學年 | |
| | | 第八級 | 第七級 | 第六級 | 第五級 | 第四級 | 第三級 | 第二級 | 第一級 |
| 身脩 | 身脩 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| | 式禮諸 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| 方讀 | 方讀 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| | 方作 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| 習字 | 習字 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| | 算術 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| 唱歌 | 唱歌 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| | 讀科口 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| 遊歩 | 遊歩 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| | 説話 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |

附言 余の此の學校を設けんとするその初
謂らく子守學校へ元來子守に任むるの女
兒を教ふる處あれば教科及教則の如きも
普通の小學に用ゐるものと其の趣を同く
せべあらばと乃別な簡易ある教科を撰
教則を草して之を認可を茨城縣廳に請ひ
たるに目今施行する處の小學初等科の
教則の如きは最簡易あるものなるが故
に宜く之に據るべし別な教則を撰定し
て以て之を教授するが如きは認可し難

しと指令せられたり然るに我猿島郡長よ
り更に内達せらるる所に據るに曰子守學
校へ貧民の女兒に學科を授け得るの益あ
るのとあらず兼て民間の容儀慣習をも改
良するの一大美舉をせば偏に屈せず撓
まざるの精神を以て教授せられんこと
こそ望ましけれきを單に本縣の教則
よのを據て不便の憾もあらずよきほど
に斟酌して教授あらばよし云々と因て
本縣の教則を本とし僅に斟酌を加へて

此の教則を定めたるなり

第八章 本校の經歷

余嘗て子守を教育するの果して社會に益あるべきを信ずること已久くいふもして子守學校を設けて此の輩を賤く愚ある境界より救ひ出してその心性を善くその容儀を雅く以て社會の安寧を益し福祉を長せんと思ひ夙に夜に忘るゝの違ふことありて已めて志ある者をあたひて方之を設けんとするに至り一郷之が爲に囂く人々相語りて曰女

兒を驅て子守學校に入らむるハ他日成長の後之を徴し應じて兵役に従事する者の妻たらめんとするにあらざるかきや或ハ曰彼陽に教育し力を盡すの狀を似し陰に俸給を加へらむんことを圖るあらん或ハ曰その費用の如き寄附金を名としてその實ハ戸數に賦課するあるべし又曰ある狡猾にして利を貪るの教師をして我々郷の學校にあつてむべからむ速し之を逐ふに若かず或ハ曰彼を江河に投じて以て此の憤を泄さんと一犬虚に吠て萬犬

實を傳へ遂に途に相見るも寒暖の禮をさへ叙せざるのところが睚眦を以て相俟つに至り之が爲に影響を小學に來し一時の生徒の校に出る者少きを見たり既にして有志者の幸之を説き諭をあり且自來て業を授くるの實を觀る者亦漸く多く始て今日あるを致せしなり

第九章 本校維持法附十六年上半期校費

決算表并學資金寄附人名表

本校も亦是學齡の女兒を教ふるの場ありその

事し子守に從へるの故を以て費用の支給を普通の校費に仰ぐべからざるものとせるに公平にあらざるが如く然れどもその筆墨紙を給するの費用に至るまで之を普通の校費より出さるべきものとせるに亦權衡を失ふに似たり是を以て本校にその校舎及書籍器械等に係る費用を之を公立學校費の支給に仰ぎ生徒に給する筆墨紙等の如きは之を寄附金の支へ辨ふる所とし假し一校を設け生徒を募りて之に教授せし漸く學の歩を進むるの勢あるを視て之が

父たり兄たる者も大に感ずる所あり相語りて
曰斯の愛で育つべき子弟をして學に就けしめ
めば一生を不學の中終らしむるは父兄たる
者の職を盡せりと言ふべからず今よりして後
自一層の儉約を加へその資を以て子弟に筆墨
紙等を給するの費に供へんと爾來女兒の正科
に入る者十有餘名の多きを加へ亦子守生徒に
給する筆墨紙等の費用の如きも日を追てその
額を減ずるに至れり抑父兄の女兒をして毎に
子守に任せしめ之をして正科に入らしむる能

はざる所以のものに是筆墨紙等を給するに困
むる原由あるはあらずして畢竟稚兒を托するの
道なきに苦むるに因れるものと然らば女兒をして
學に就けしめんが爲に別は嬰兒を管護するの
任を托すべき人を雇はんや之は衣食の資を給
するに貧き者の能く耐ふべき所にあらず是に
於て已を得ず女兒をして之に任す之の爲に學
に就く期を誤らしむるは外あらずあるは是
の故に校舎の構造その宜を得て稚兒を携へ昇
るに堪へ教師の注意その處を得て稚兒を管護

もるの道立たばその之を維持もるの方法の如
きへ縦ひ學資乏きとの郷と雖亦容易に設く
るを得べし今余が實施もる所の法を以てこれ
を本科生徒の席と子守生徒の席と相接せしめ
即本科を教へ授くるの餘間を以て業と子守生
徒に授け其の間本科生徒よりその年長よりて
品行の正しき者數名を撰て算術習字等の科
を授はるゝ教へ授けしむるを以て別な教員
をも増さむして兩校の生徒を教ふることを得
たり茲に明治十六年二月本校を開きてより同

七月に至る半年度の校費決算表を製して讀む
者の參考に供ふること左の如し

| 公立學校學立公 | | | | | | | | | | |
|---------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ル係二給支リヨ金資校學立公 | | | | | | | | | | |
| 費目箇數代價圓錢厘 | | | | | | | | | | |
| 費 | 度 | 初 | 月 | 二 | 年 | 六 | 十 | | | |
| 諸 | 藁 | 玩 | 塗 | 生 | 椅 | 教 | 師 | 用 | 机 | 費 |
| 雜 | 筵 | 具 | 板 | 徒 | 子 | 師 | 用 | 机 | 一 | 目 |
| 費 | 廿 | 箱 | 二 | 用 | 一 | 机 | 用 | 机 | 脚 | 箇 |
| | 五 | 二 | 面 | 机 | 脚 | 脚 | 脚 | 脚 | 數 | 代 |
| | 枚 | 箇 | | 廿 | | | | | | 價 |
| | | | | 五 | | | | | | 圓 |
| | | | | 脚 | | | | | | 錢 |
| | | | | | | | | | | 厘 |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |

三守教書江
七三 部外金新附

| 寄附金ノ支辨ニ係ル以下皆同 | | | | | | | | | |
|---------------|---------|-----|------|---|-----|-----|---------|-----|-----|
| 十六年二月初度費 | | | | | | | | | |
| 計 | 費目 | 箇數 | 代價 | | | | | | |
| | 筆 | 百本 | 一三〇 | 墨 | 五十挺 | 一七五 | 半紙 | 百帖 | 一八〇 |
| | 鉛筆 | 五十本 | 七五 | 石 | 五十本 | 二〇 | 硯 | 五十箇 | 二〇〇 |
| | 玩物飾物諸雜費 | | 一五〇 | 度 | | | | | |
| | 初 | | | 石 | 五十面 | 二五〇 | 硯 | 五十箇 | 二〇〇 |
| | 費 | | | 硯 | 五十箇 | 一五〇 | 玩物飾物諸雜費 | | |
| | 計 | | 二七八五 | | | | | | |
| | 圓 | | 錢厘 | | | | | | |

| 生徒五十名 生徒六十名 | | | | | | | | | |
|-------------|-----|------|------|---|-----|------|----|------|------|
| 十六年三月初度費 | | | | | | | | | |
| 計 | 費目 | 箇數 | 代價 | | | | | | |
| | 筆 | 四十五本 | 六七五 | 墨 | 五十挺 | 七五 | 半紙 | 四十五帖 | 八一 |
| | 鉛筆 | 一本 | 一五 | 石 | 四十本 | 一六 | 硯 | 四十本 | 一五 |
| | 諸雜費 | | 一五 | 計 | | 二六九五 | 計 | | 二六九五 |
| | 計 | | 一〇八〇 | | | | | | |
| | 圓 | | 錢厘 | | | | | | |

三三 部外金新附

| 生徒十四名 | | | | | 生徒五十四名 | | | | |
|-------|-----|-----|----|----|--------|-----|----|-----|------|
| 十六年五月 | | | | | 四年四月 | | | | |
| 筆 | 墨 | 半 | 石 | 諸 | 筆 | 石 | 半 | 石 | 諸 |
| 筆 | 紙 | 紙 | 盤 | 雜費 | 筆 | 紙 | 盤 | 雜費 | 計 |
| 二十五本 | 七挺 | 五十帖 | 七本 | 二面 | 十八本 | 十五帖 | 二面 | 計 | |
| | | 一〇 | | | | | | | |
| 三七五 | 一〇五 | 〇 | 二八 | 一〇 | 七二 | 二七 | 一〇 | 一二五 | 一〇一七 |

| 生徒五十四名 | | | | | 生徒五十四名 | | | | |
|--------|----|----|----|-----|--------|----|----|----|-----|
| 十六年六月 | | | | | 十六年六月 | | | | |
| 筆 | 墨 | 半 | 石 | 諸 | 筆 | 石 | 半 | 石 | 諸 |
| 筆 | 紙 | 紙 | 盤 | 雜費 | 筆 | 紙 | 盤 | 雜費 | 計 |
| 十二本 | 八挺 | 八帖 | 九本 | 十一本 | 十二本 | 八挺 | 八帖 | 九本 | 十一本 |
| | | | | | | | | | |
| 一八 | 二〇 | 一四 | 四五 | 二二 | 一八 | 二〇 | 一四 | 四五 | 二二 |
| | | | | | | | | | |
| 二七 | 一七 | 二〇 | 四八 | 九七 | 二七 | 一七 | 二〇 | 四八 | 九七 |

| 生徒四十三名 | | | | | |
|--------|----|-----|-----|-----|-----|
| 筆 | 墨 | 半 | 石 | 鉛 | 諸雜費 |
| 七本 | 三挺 | 十二帖 | 十一本 | 七本 | 計 |
| 一〇、 | 七五 | 二一六 | 五五 | 一四、 | 一七、 |
| 七六一 | | | | | |

右寄附金ヨリ支辨スル金額總計一十八圓二十九錢五厘之ヲ六箇月ニ分割スレバ一箇月平均三圓〇四錢九厘強ヲ得

今此の決算表に據て推考するときハ教育のその歩を進むるに隨ひ筆墨紙等の費用ハ大抵生徒の父兄自之を給するに至ることを期して待つべしされば多くの資金を要せずして普く子守學校を設くるも亦得て望むべからざるにあらず唯意とせる所ハその校舎を別よせざるべしとざるに隨て教師の勞を要するといはるのよ世の教育家たる者宜く此に據て推考する所あり

寄附金人名簿抜書

一金拾圓

茨城縣猿島郡小山村

渡邊 嘉重

一金五圓

茨城縣猿島郡小山村

関 文平

一金拾圓

吉葉林二郎 一金三圓

荒川榮三郎

一金拾圓

佐々木 隆 一金三圓

鈴木新三郎

一金七圓

福田周造 一金三圓

小林宗三

一金七圓

小川文十郎 一金三圓

荒井孝平

一金五圓

千葉縣葛飾郡船方村

染谷重作 一金三圓

小川喜八

總計金六十九圓

内金十四圓八十錢

殘金五十八圓二十錢

一ヶ月金一百十六錢四厘

一ヶ年金十三圓九十六錢八厘

初度違拂

二歩ノ利子ニテ貸置

利子

子守教育法終

彫刻師 上山

摺師

製本師

明治十七年八月廿六日版權免許
同年九月 出版

定價廿五錢

著者 茨城縣平民 渡邊 嘉重

茨城縣下總國岡田郡
花嶋村五拾五番地

出版發兌 普及舎

東京下谷區練堀町
拾四番地

